

<牧会ミニ通信>No.36 2021. 1. 24.

横浜では33年もの長きにわたり牧会を許されました。礼拝説教は、地味なうえにも地味な、連続講解説教のスタイルを心がけました。日曜日の礼拝を「モーニング・サービス」といいます。朝の食事といえば、多くはいただいたことすら直ぐ忘れてしまいます。それでも一日の確かな活力となっています。長年定住している牧師の説教とは、その程度が良いのではないかと自らに言い聞かせてきました。それで、良かったのです。気が付けば、いつしか礼拝は豊かに祝されていました。

しかし、牧会30年を過ぎた頃に、主から再献身の促しを受けました。

辞任すべき理由を4000字にまとめて役員会に提出、次いで臨時の教会総会において賛否を問いました。しかし、全員反対です。

横浜本牧地区に宣教を始めて、既に50数年が経過しており、ここまでに至った教会を、いまさら辞任する理由がない、名誉牧師ならどうか、などというさまざまな意見が出ました。その一つ一つは感謝でした。

身辺が整わなくては、辞任は叶いません。教団内の責任、対外的な責任、後任問題がありました。さらには、三人の子供たちの問題がありました。こうしたもろもろの事情が整わない限り、辞任は叶いません。しかし、降誕節後の四回目の臨時総会において承認されることとなりました。後任牧師は、翌年神学校を卒業する当教会の献身者です。全てをゆだねることのできる事情が整いました。

こうして、2001年の春、わが妻と、わが娘と、86歳の寝たきりの妻の母親を伴い、横浜をテイク・オフし、沖縄県中頭郡読谷村の開拓に向かいました。今ならいえることですが、教団から派遣されてのことではありません。わたしと妻とに祈りのうちに示されたことです。しかし、後には、日本同盟基督教団「読谷聖書教会」として加入することになりました。

かくして、新天新地における新たな一歩が始まりました。

「アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った」(ヘブル11:9)。

周東のぞみキリスト教会：牧師 結城晋次